

エドゥアルト・シュプランガーに関するフリッツ・ヘリンク

Fritz Helling über Eduard Spranger

山元 有一
Yuichi Yamamoto

鹿児島女子短期大学

In der Zeit Weimarer Republik, auch nach dem Ende des 2. Weltkrieges veröffentlichte Fritz HELLING [1888–1973], der in Japan fast gar nicht bekannt wird, die zahlreichen Aufsätze, die gesellschaftskritisch und gegenautoritär war, als linker Gymnasiallehrer, nicht als Universitätslehrer. Schon vor der Machtergreifung der NSDAP spürte er die Gewandtschaft mit radikalem Konservatismus in der geisteswissenschaftlichen Pädagogik, insbesondere in der politischen Pädagogik Eduard SPRANGERS [1882–1963]. 1932, d. h. als die Sammlung der Abhandlungen und Reden SPRANGERS über politische Erziehung: „Volk, Staat, Erziehung“ publiziert wurde, reagierte HELLING in dem Organ des Bundes der Entschiedener Schulreformer: „Die neue Erziehung“. Das ist die frühe Auseinandersetzung mit dem konservativen Denken SPRANGERS, war aber werkimmanent. Auch in der Periode, wo die Intellektuellen in der NS-Zeit, wie z. B. Hans WENKE, ein Schüler SPRANGERS und zwar ein Mitherausgeber von der Zeitschrift konservativ-geisteswissenschaftlichen Pädagogen: „Die Erziehung“, als braue Universitätslehrer für schuldig gehalten wurde, schrieb HELLING noch einmal über SPRANGERS Weg zu HITLER [1966], behandelte aber politische Andeutung im pädagogischen Diskurs aus die politisch-sozial-kulturellen Konstellation. Zwar sind seine Behauptungen über die Haupttendenzen des Denkens SPRANGERS zum Teil richtig: seine Distanz zu Demokratie oder Parlamentarismus, zersplitterte Parteien, dagegen Primat des Staates gegen Individuum, seines Vertrauen auf die Ideen von 1914: einigte Ordnung oder frömmiger Dienst, dagegen seiner Greuel vor Klassenkampf, etc.. Diese sind allerdings nicht immer das, was sich SPRANGER willig zu Faschismus geführt hat, sondern sich nur das, was die Sympathie für das Preußisch-Konservative in seiner Stellung bestätigen läßt. Er hat sich zu die Bewegung HITLERs und ihre Weise gewandt, vielmehr sich allein ihnen unterordnet, aus verschiedenen Gründe. Trotzdem ist prägnant das Urteil HELLINGs, daß SPRANGER wie andere Universitätslehrern einsichtslos dem deutschen Katastrophenweg fördern würde, wenn er das falschen Schein der Versöhnung, das während 1. Weltkrieges das Volk beherrschte, glaubte. Er hielt fern und die konservativen Denkart gäbe preis -dennoch würde er vielleicht nicht zu Sozialist werden wie HELLING. HELLING kritisierte nicht SPRANGER, sondern schirderte das Bild der nicht elastischen und in die Räder der Geschichte verwickelten Intellektuelle als ein Fall in verschiedenen und ähnlichen Fälle.

Stichwörter : Helling, Spranger, Nationalsozialismus, das Konservative.

キーワード : ヘリンク, シュプランガー, 国家社会主義, 保守

わが国においてフリッツ・ヘリンク (Fritz Helling/1888–1973, 本名はフリードリヒ・ヨハネス・ドロステ [Friedrich Johannes Droste]) の認知度はほぼないに等しい。ドイツにおいては、アードルフ・ライヒヴァインの教育思想を公に伝えるために2011年と2015年に5巻本の選集が出版されたことが象徴的であるように、暗黒の時代、ナチズムの抑圧の状況下に、伏流あるいは別流として生き延びるより他なかった教育(学)者たちが、20世紀の終わりまでにかなり発掘されるようになった——例えば、我々が取り扱った経験のあるフリードリヒ・コーパイヤほんの一部言及したアンナ・ジームゼンもいる。ヘリンクもドイツでは21世紀に入り、改めて考察の対象となり得る人物と

なっている。確かに、既に彼の生誕100年を記念して1973年の死去以後、1988年にアイアーダントとハイネマンによる解説文付のヘリンクの選集が公刊されている。とは言うものの、そこに収録された文章は削除や字句の変更があるほか、文献目録もほとんど徹底していないものであった。2003年になってようやく、ブルクハルト・ディーツの編集により、主にヘリンクの複数の回想録を下敷きにしてディーツやヴェルフガング・カイク、クラウス・ヒンメルシュタインなどによって、ヘリンクの全体像をできる限り明らかにしようとする試みがなされており (Dietz2003)、その後にはヘリンクの自叙伝『政治的教育者としての私の人生』も出版されている (Helling2007)。とはいえ、彼の

膨大な遺稿は様々な場所に、整理されていない状態である (vgl. Keim 2003, S.39). カイムがヘリンクを謎めいた「興味深いアウトサイダー」(ebd., S.38) と特徴づけているのもうなずけるところである。

ところで、彼の死後約50年を経て、我々が彼を取り上げる必要があるのかという問いの前に、我々は立たされる。彼は一介の——しかし、優れた——学校教師、学校長であり、教育者としては尊敬を集めるものの、時代の制約と彼の思想傾向——1920年代後半以降の社会主義あるいは共産主義——もあって、話題にも上がらず、しかも大学人としての教育学者でもなかったために、精神科学的教育学者ほどの影響力も持たなかった。また、彼は政治的傾向から、ナチスによって1933年から1945年まで公職から追われ、それでもナチスに屈服した教員同盟に加わることなく、私立学校で勤務しつつも投獄され、ヒトラーの自爆の後には今度はアデナウアー政府による赤狩りの下で定年前にもかかわらず再び公職を自ら辞するという二度の憂き目に会った。それは彼がよく執筆していた雑誌『新教育』のわが国における所蔵状況にも反映されている。我々は彼の文章の収集にきわめて苦勞した。精神科学的教育学者が編集した雑誌『教育』と比べれば、『新教育』に目を通すことは難しい。それでもなお、本稿においてヘリンクの文章——彼の文章は我々が見る限りでは、数編を除いて非常に短く、大著と呼べるものはない——に取り組むのは、いくらかの根拠がある。何より、彼はゲッティンゲンやベルリンの大学で当時としても有益性の少ない文献学(ギリシャ語、ラテン語)を教職のために学びながらも、大学人を目指さず——後に見るように、その理由は重要である——、郷里シュヴェルムの田舎ギュムナジウム教師に留まり続け、その職責において興味深い教育実践を行う傍らで、「徹底的学校改革者同盟」の有力なメンバーとして活動し続けた。そこには彼なりの確信があったとも思われる。また、第一次世界大戦でのドイツの敗北の際しての心理的動揺、迫りくる国家社会主義の恐怖、第二次世界大戦後の冷戦が予感させる新たな形態の帝国主義という「戦争の予感」、これらはダリのあの絵画のように彼の心にぽっかりと穴を開けている。しかし、第一次世界大戦敗北の動揺を通しての自己更新の模索、それを通して得られた信条に対するナチスによる幽閉判決、戦後のアデナウアー政権における「赤狩り」、これらを通じてヘリンクの行動にはおぼれはなかった。したがって、彼の首尾一貫した主張を、取り上げることに、一定の意味がある。

さしあたり我々はその一貫した基調を知るために、エドゥアルト・シュプランガー(1882-1963)に長らく関わってきたという経験から、彼の1966年の文章を取り上げ、それをヴァイマルからヒトラー政権掌握にかけての文章に関

連づけつつ探っていききたい。本稿のタイトルが示しているように、主眼はヘリンクのシュプランガー批判ではない。むしろ、いまだに有効なヘリンクの批判的観点である。先んじて述べておけば、1966年の文章はヘリンクの広範な歴史的・政治的観点からの事例報告である。

*

「さしあたり」と我々が現時点で言わざるを得ないのは、残念ながら目を通すことが叶わず、それ故にヒンメルシュタインなどの論文に頼って類推するしかなかったヘリンクのナチスの政権掌握直前の「政治的教育学者としてのシュプランガー」と題する文章が雑誌『新教育』に存在するからである。その直前に彼は、マインツで「国家社会主義に接近するまでのシュプランガーの展開」に関する講演を行っていたが、既にシュプランガーが十分な名声を得ていたために、それは強い反発を招き、無視された(vgl. Himmelstein 2003, S.308)。とはいえ、この時期に早くも、1960年代に盛んになる観点が示されていたことは注目に値する。そのマインツ講演を下敷きとする1933年2月の文章は、前年の9月に出版されたシュプランガーの『民族、国家、教育』の論評という形をとっている。当時、この著作についてはいくつかの書評が存在していた。例えば、ドイツ国民教員同盟の雑誌『国民教育』でA・ディートリヒは、「その著作には正しい生活への近さが欠けており、民族と国家と教育の血の運命性については何ら感じられない」とし、またドイツ学生組合の雑誌『ブルシェンシャフトリッヒェ・ブレッター』でH・ハウスケは、「革命家クリークに対して、改革者シュプランガーが対置している」(vgl. ebd., S.309)と批判しているほか、シュプランガーの高弟フリードリヒ・コーパイも微妙な苦々しくも賛同的と思える書評を『ドイッチェ・シューレ』誌で公にしている。

ところで、ヘリンクがこの論評の30年ほど後に再び同じテーマを取り上げたことは既に述べた。1966年、既に50年近く巷間や青年、大学教師の間で優れた教育学者とされていた人物シュプランガーが亡くなってから3年後に、ヘリンクは今触れた自らの1932年の文章をさらに補強しながら、シュプランガーに再度否定的な評価を下している。我々はそのときのヘリンクのものに対する当時の一般的な反響を知ることはできない——後に見るように、それが掲載された雑誌『学校と国民』内部に限られた議論にすぎなかった。しかし、1945年以後にナチズムとのシュプランガーの関係を取り扱ったものは全く存在しなかったから、問題作品でもあった。それには1960年代の時代状況が反映されていたのであろう。その時期の反権威主義的な学生運動や叢書『褐色の大学』シリーズによるヴァイマル期からナチス時代における大学人に対する詮索と批判、またシュ

プランガーやノール、リットなどの聖人に列せられた精神科学的教育学者たちの相次ぐ死去によってこの教育学に対する疑念と再検討の蓋が開かれたことなどが、ヘリンクを後押ししたと思われる。この文章はおそらくシュプランガー擁護者たちによって計画されていた『シュプランガー全集』の出版を加速させる契機ともなったのであろう。少なくともその全集に深く関わったヴァルター・アイザーマンは、『学校と国民』誌におけるこのヘリンクの文章をシュプランガーへの恥辱と捉え、同雑誌に反論を掲載するよう求めている。それでは以下で、まずヘリンクの1966年の短いシュプランガーの支持者を憤らせた文章に目を通してみたい。引用が積み込まれるのは避けられない。というのも、ヘリンク自身が引用を多用し、その背後に身を隠しつつ、自らの主張をそれに語らせているからである。これは彼の文章での常套の手法である。

「ヒトラーへ向けてのエドゥアルト・シュプランガーの道」に関する文章（Helling1966, 以下、「シュプランガーの道」と略す）でのヘリンクは、我々が彼よりの態度を取るなら、国家社会主義の政権掌握に対してシュプランガーが、無自覚に寄与してしまった前史を1916年の著作『ドイツの教育政策の25年』（N099）にまで遡って、主に1932年に出版された、この「カイザー・ヴィルヘルム時代以来、……最も影響力のあった教育学者」（Helling1966, S.1）の論文講演集『民族、国家、教育』（N330）——これは1916年から1932年までの文章が収められている——を順次取り上げて立証し、その後のシュプランガーの文章で再確認している。シュプランガーの1916年の著作は実際のところは、前年から『ペダゴギーシュ・ブレッター』誌において5回に渡って掲載されたものを一つにまとめたものだが、1915年からこの著作の序文の日付（3月21日）あたりでは、既にヴェルダンの戦いは開始されていたものの、ヘリンクが「第一次世界大戦での勝利と希望の時期」（Helling1966, S.1）と語るように、この大戦においてまだドイツの攻勢は概ね続いていた。したがって、1914年8月体験はシュプランガーの中でもまだありありと持続していたと見てよい。序文で語られる一文がそうである——「国民的な教育理想は今日、純粋な文字の上で見出されるものではなく、……個々人の精神において育つものでもなく、むしろ生き生きとした民族意識全体そのものの母胎から生まれるものである」（N099, S.VI）。ヘリンクによれば、この著作は戦争においてドイツが優勢であることを可能にした政治教育——「将校を教育者として作動させ、軍隊が一般的な社会教育の精神に関わる」（ebd., S.1）——を叙述することを通して、ポツダムを精神を賛美するものであった。したがって、シュプランガーがもはやヴィルヘルム・フォン・フンボルトを雛型としていなかったとされる。このことを

ヘリンクはシュプランガーの同じ年の教育教授中央研究所の創設に際してなされた「人文主義的教育理想と政治的教育理想」に関する講演（N100; N330a）を引き合いに出して証拠立てようとしている。この講演は「人文主義的で政治的な」教育理想ではなく、二つの理想を峻別してタイトルにしているところに彼の主旨は明らかであろう。「私たちの時代も厳格な政治的必然性の下にあり、ドイツの教育の私たちの時代の目標に沿って変更されねばならないのが当然である」としますなら、この転回は政治的に条件づけられており、国家生活の側面へと方向づけられることになるのは疑いがありません」（N100, S.4; N330, S.3）。戦争の最中においてごく当然に「シュプランガーは戦争の肯定と民族の犠牲や不自由の肯定のために、ドイツ民族を獲得することを目的として自らの全知識と自らのあらゆる雄弁さを投入する」（Helling1966, S.1）。

もちろん、シュプランガーが期待したようには時は流れず、ドイツは敗北し君主制の官僚制的軍隊的国家は崩壊して、これに代わって議会制民主主義のヴァイマル共和国がその産声を上げた。だが、彼が戦争を惹き起こした旧体制に対する批判を実行しなかったとヘリンクは主張している。ヘリンクの示す根拠は、何よりも「押しつけられたヴェルサイユ条約」に対するシュプランガーの反応である。おそらくヘリンクが1933年の最初のシュプランガー批判から30年以上も経って、改めてその批判を蒸し返したのは、1960年代後半の状況もさることながら、この反応に彼がどうしても納得できなかったからであろう。後の触れるアイザーマンの反論の根拠の一つに、ヘリンクが——彼はゲッティンゲンとベルリンで文献学の大学学習をし、ミンデンとシュヴェルムで教員試補として勤務していたが、自由志願兵として戦争に従軍しシャンパーニュやフランドルで戦い、1915年の終わりにフランス東部ライン川左側（アルザス）のヴォージュでの突撃攻撃の際に重傷を負い（この勇敢さが認められて、第二級鉄十字勲章を授与されている）、その後、祖国へ帰還、学校勤務に復帰している——第一次世界大戦終結まで「帝国主義の希望の夢の中で……ドイツの勝利を信じて」いた（Helling1958, S.85）という彼自身の後の告白があるが、これは確かに当時のヘリンクとシュプランガーの精神的類縁性を示すものである。したがって、ヘリンクがシュプランガーを攻撃するに当たって戦争終結以前のシュプランガーの文章を引用することは、当時のヘリンクにも跳ね返ってくるものであった。それ故、アイザーマンはヘリンクが不当に「信条同胞を貶めている」（Eisermann1967, S.17）、つまり戦争中の文章からの証拠立てはお門違いだと反論するのであり、これは一理あるとも言える。とはいえ、この二人の大きな違いは、ヘリンクが戦後にドイツの戦争責任を引き受け、自己批判を

通して(社会主義的)民主主義に転向したのに対して、シュプランガーは何らの態度変更も行わなかったという点にある。シュプランガーが「ドイツは第一次世界大戦の罪を負っていない」(Helling1966, S.2)という考えであったとヘリンクは見ており、このことをフランス軍によるルール占領後の1923年にベルリン大学のライヒ建国記念式典でシュプランガーが行った講演「ドイツの国民意識の成立への新人文主義の関与」(N330b)で跡づけている。シュプランガーからのヘリンクの引用はこうである——「侵略者の激しい欲望を私たちは僅かしか知りませんでした」(ebd., S.36)。ヘリンクにとってシュプランガーは責任回避をしていると思われた。それどころか、ヘリンク自身が実地に体験していた愛国主義者の抵抗が頻発するルール占領の状況下で、ドイツ人の人権が守られない場合には、「スパルタ的なものが私たちの中に生き生きとしたものとなります」(ebd., S.56)とシュプランガーはしているが、そこにヘリンクは彼に潜む戦争肯定の臭いをもかぎつけている。それだけでなく、この講演のなされた日付が意味深長である——ヘリンクは講演の日付と場所にかなり拘っている。この講演はライヒ建国の1月18日になされたものであったが、このライヒとはヴァイマル・ライヒではなく、1871年の旧体制のライヒ、つまり既に実体(?)のないものを記念するものであった——言うまでもなく、ヴァイマル共和国の建国日は11月9日である。この点に我々はヴァイマル共和国に対するシュプランガーの距離感と同時に、旧体制への持続的な信頼を感じ取ることができる。ヘリンクが自らの文章にわざわざ日付を記したのは、講演という行動におけるシュプランガーの保守性を明示したかったからであろう。この距離感をヘリンクは、シュプランガーが1924年に「ドイツ民族意識への教育に関して」行った講演(N330c)をベースにさらに補強する。だが、その前にいったん「シュプランガーの道」から離れて、ヘリンクが捉えていたドイツの中等教育機関の歴史的社会的経済的連関に目を通してみたい。というのも、ここでの議論とよく似た観点が示されているからである。

ヘリンクは1929年に雑誌『新教育』で、「中等教育機関の悲劇」(Helling1929a)と題する文章を公にした。彼はドイツにおける中等教育機関が19世紀の初頭に、「日常や職業、生活現実の心配事を越え出て」「普遍的な人格形成」という首尾一貫した教育理想から成立した」という周知の事実から出発する(ebd., S.4)。しかし、それは「軽蔑されていた現実の世界」、つまり人間形成を目標とせず、「むしろ規律、躰、秩序、権威、従順、時間厳守、義務の充足が重要である」とする国家からの「報復」を受け、中等教育機関は「人文主義の総体性理想と軍隊国家の臣民理想」という「巨大な矛盾」に置かれる(ebd., S.4)。ついで、同

様に蔑まれていた現実世界の経済市民層、「自由主義的な市民層が経済や技術、自然科学における自らの力の解放を通して、資本主義的に生成する社会の共同規定的な要因へと成長」し(ebd., S.4-5)、これによって中等教育機関は古典主義的形式的教育と市民的功利主義的教育の間で第二の矛盾をも抱え込む。そして、第一次世界大戦の終結と軍隊の官僚制的国家の消滅によって、この二つの矛盾を解決する時代がようやく到来したように思われ、これまでの紀律と権威の「学校兵舎」や「授業兵舎」(ebd., S.4 u. 6)——これらはヘリンクが好んで多用する表現である——からの転換という新しい課題が生じてくる。具体的には、彼が属していた徹底的学校改革者同盟の諸課題であるが、「自治や学校共同体、教員同士による学校経営、教員集団の統一」、教科の「選択自由を持った生活学校や行動学校による学問学校の克服」などである(ebd., S.6)。だが、これらの目標は何一つとして実現しなかった。というのも、次の引用がヘリンク理解にとって極めて重要であるのだが、「フィロローゲンと大学教師たちが従来の社会の権力と結びついて、この歴史的決断の時に中等教育機関の救いとなる改造を邪魔立てした」(Helling1929a, S.6)からである。結局のところ、「従来の精神、従来の体制、従来のカオス」(ebd., S.6)が存続し、中等教育機関の保守化——これをヘリンクは「反動の勝利」(ebd., S.6)と呼んでいる——がさらに進み、「普遍主義的フマニズムは放棄され、……ナショナリズムが取って代わった」(ebd., S.7)。こうして「中等教育機関は……狭められ過去に規定された国民イデオロギーの虜になる」(ebd., S.7)。そして、黄昏のヴァイマル期の局面をヘリンクは「精神的な地平の限定」(ebd., S.7)と批判し、この政治的反動の証拠を「学校と在外ドイツ人協会との間にある緊密な結びつき」(ebd., S.7)に見ている。中等教育機関の悲劇とは、国家と経済による「上からの強要」によって葛藤と矛盾の状態に置かれた中等教育機関がようやくその解決に向けて進もうとしたその瞬間に、大きな影響を持っていた保守的な大学教師と大学で養成された保守的なギムナジウム教員によってその進路を完全に阻まれたということであった。

閑話休題。実のところ、1924年のシュプランガーの講演は、ヘリンクがナショナリズムの温床として攻撃した在外ドイツ人協会の中央委員会でなされたものであった。したがって、シュプランガーの保守性はここでも歴然としており、ヘリンクはこの講演で語られるシュプランガーの国家観の中に、中等教育機関の悲劇の淵源を見ている。シュプランガーの大前提は、学習者ではなく国家、「下からではなく、上からの」強権的権威であった。強力な民族意識にとって「確固として強力な国家を所有していることが必然的な前提です」(N330c, S.63)。彼のこうしたスタンスから

は、新体制への政治的反感ばかりでなく、民主主義への不信心をも露わにする。「ヴァイマル民主主義はこの前提を充足しないことを、シュプランガーは隠さない」(Helling1966, S.2)。それどころか、ヴァイマルに潜む諸政党や諸階級の「分立主義における集団エゴイズムと嫉妬」(Helling1966, S.2)に源を持つ「憎悪に満ちた階級闘争」(N330c, S.70)が回避できない状況下でシュプランガーは、子どもや青年が「共通の未来信仰」の人々(N330c, S.61)、つまり国家への「殉教者」(N330c, S.76)となることを期待しているという。これに関連して、『民族、国家、教育』所収の続く論文「政治的民族教育の諸問題」(N330d)での「超個人的な権力態度へ向けての意志の教育」(ebd., S.81)や「国家のための私的な現実存在の犠牲」(N330d, S.85)といったシュプランガーの表現は、ヘリンクにとってまさに「崇高なる殉教者へ向けての教育」であった。そして、再びシュプランガーは1930年の1月18日、例のいわくつきの日に、「現代の世界決断における幸福倫理と犠牲倫理」と題した講演(N330e)で、「私たちは1914年の聖なる一致や誇りある満場一致の希望、……全員一致の犠牲を思い出しましょう」(N330e, S.107)と語りかけ、この1914年の理念が「融和の仮象」であることを認めず、依然として旧体制への支持表明を確認している。さらに同じ年に「民族教育協会」の講演「民族の知識、民族の教育、民族の統一」(N330f)では、シュプランガーに「初めて国家社会主義的表現と方法」(Helling1966, S.2)が認められるとヘリンクは語る——「民族を民族たらしめる共同作用が有している四つの要因があります。つまり、血、労働、秩序、敬虔です」(N330f, S.138)。なお、ついでながら興味深いのは、この講演で開陳されているペスタロッチと1927年に示されたヘリンクのペスタロッチ解釈とのかなりの相違である。確かにシュプランガーが「ペスタロッチはまだ大都市の諸問題を知りませんでした。しかし、工業によって到来した重大な混乱を予感し、機械時代や人類の『人格疎外』、根無し草で相続権もなく、……締め出された階級の運命を予感していました」(N330f, S.137)と語る点では、ヘリンクともよく一致している——「経済の混乱」と国家の介入による「悲惨さの中でペスタロッチは貧者や被抑圧者の側に立っている」(Helling1927, S.13)。「教育による以外に、人間性への陶冶なしに、人間形成なしに救いはあり得ない」とするペスタロッチの「教育による社会変革」を両者とも共有している(vgl. ebd., S.14)。とはいえ、ヘリンクがペスタロッチの失敗続きの「名声と軽蔑の間で、使命の意識と罪の感情の間で、信仰と疑いの間で」のイエス・キリスト的「殉教者のような」営みが、フランス革命によって彼に呼び覚まされ、「社会に罪がある。社会が自ら惹き起こしたことは社会が償わなければならない」

という革命的な観点から(vgl. ebd., S.11, 13)、投獄者や自らの子どもを殺害さえる未婚の女性、税の圧力に苦しむ地方の民衆、貧者の子どもたちといった見向きもされない人々の支援や「経済賃金奴隷の調教ではない工業へ向けての教育」(ebd., S.13)を目指したと把握する一方で、シュプランガーはペスタロッチが「民族の道徳性の番人であり、個々人がその完全な価値形態へと至ることができるための不可欠の健全な結びつき」(N330f, S.140)の復活を求めて活動いたと捉えると同時に、ニュートンの名を挙げつつ、ペスタロッチを「18世紀の子」として社会に階層的に「秩序立てられた重心配分、諸々の力の調和的均衡を見ていた」人物としている(ebd., S.137)。我々は、ヘリンクの革命的傾向に対して、シュプランガーの復古的修正的傾向を対比することができるであろう。また、ペスタロッチの弱者へのまなごしの二人の受け取り方の相違は、別の箇所でも指摘可能である。例えば、シュプランガーは1930年の『ドイツの学問の50年』で「教育学」の歴史的叙述(N301)を担当しているが、そこで彼は教育学が学校に拘束されることから解放されたことによって、社会改革という問題意識が形作られたとしている(vgl. N301, S.83, 86, 94)。その際の問題とは伝統の喪失と匿名の大衆という問題の解決に、教育でどう応答するかということであった。「のし上がったきた階層」はこれまでのドイツの教育の伝統的財産を退け、それどころか伝統にある「倫理的な意志の力」をも拒否している(ebd., S.95)。これを彼はマルキシズムと社会主義に結びつけている。そこで彼は教育学の役割を無政府状態の克服、別言すれば伝統的国家の再獲得とし、これが「人間精神へ向けての大衆の救済」(ebd., S.95)であるとする。他方、ヘリンクは全く反対のベクトルを取る。彼は1932年の「公的學校改革の破産」に関する文章(Helling1932)などで、弱者とされている子どもたちに徹底して寄り添い、革命的提案を行っている。当時の子どもたちは、一クラスの生徒数の増加、ドリルと鞭打ち、過剰な教材と多くの必修科目による知的抑圧、両性の分離(それにも対応する学校形式と教員集団の分離)を通して、「高度資本主義の合理化された労働技術への適合」へと強いられ、「現代の合理化された社会メカニズムにおける僅かな有用性にとっての必然的前提である平板化」の危険に晒されているとヘリンクは見ている(ebd., S.22)。この適合と平板化からの解放、つまり競争と上昇による成果を追求する「ブルジョア資本主義的興奮」と「硬直した類型学校の強制的な教育財による暴力化」(ebd., S.24)、「一方的に知的な頭脳化教育」(ebd., S.25)に彼は断固として反対し、学校の中に「新しい連帯的社会的責任感情と結束感情からすべての人々にとっての生きる可能性と生きる意味」を作り出すことを求めている(ebd., S.24)。彼は修正

主義を許さない——教育機関の「現実の状態は、修復によっても、『改革』によっても……救い出すことのできない種類のものである。……助けとなり得るのは、もっぱら根本からの新構成、社会の新構成と一緒になった新構成だけであり、したがって有意味な生活のための有意味な学校」である (Helling1929a, S.9)。フマニテートを同じように強調しつつも、シュプランガーとヘリンクとの違いは決定的である。それはシュプランガーの保守的改革観に対する革命家エルンスト・クリークとは全く逆向きのヘリンクの急進的の革命である。

いずれにせよ、ヘリンクによれば1930年以降、シュプランガーは「国家社会主義への熱烈な上昇気分につき従っている」(Helling1966, S.2)。1930年9月14日の選挙ではナチ党はその得票数を急増させ(80万票から650万票へ)、1931年10月にはドイツ人民党とシュタールヘルム(鉄兜団)と結託してヴァイマル共和国転覆の声明を出している。ヘリンクは指摘していないが、この「シュタールヘルム——前線兵士連合」とシュプランガーの蜜月関係については、ヒンメルシュタイン(Himmelstein2013)が明らかにしている。1918年の終わりに設立されたシュタールヘルムは1933年1月3日のヒトラーの最初の政府において連立のパートナーであり——連合の指導者フランツ・ゼルテがライヒ労働大臣として入閣した——、シュプランガーはこの組織を「ドイツの結束」の象徴と考えていた(vgl. ebd., S.78)。既に1919年にライプツィヒ大学時代の教え子テオドル・バルトラムは、シュプランガーに連合の代表となり、創刊予定の連合の雑誌の編集に携わるようお願い出ているが、この時点では前線体験がないことを理由に彼のその提案を断っている(vgl. ebd., S.77)。とはいえ、彼はバルトラムに同調して、『ライプツィヒ学生新聞』に「前線兵士連合の意味と課題」と題して、国民の分断とエゴイスティックな階級闘争をもたらす諸政党を超えて「1914年のように」「偉大な一致の婚姻」のアーチを架けるという目標をシュタールヘルムに期待していた(vgl. ebd., S.205)。後に触れるプロイセン政府へのベルリン大学からの辞職願を撤回した後(1933年6月)、その翌月に彼はシュタールヘルムに入会しており、1935年までそのメンバーであった。彼の入会の根拠を、ヒンメルシュタインは彼のシュタールヘルムへの政治的共感と同時に、ナチ党に距離を置く姿勢を当局に知らしめるためであったとしている(vgl. ebd., S.204)——もちろん、この時点ではナチスは既に入会制限をしていたので、黨員になることは不可能であったが、それだけでなく、シュタールヘルムがシュプランガーの支持するドイツ国家人民党(DNVP)——無論、彼の政党嫌いから黨員になることはなかった——との結びつきが深かったことも、彼の入会を後押ししたとも思われる(vgl. ebd., S.206)。しかし、

連合幹部のゼルテは既に1933年4月、つまり入党制限がなされる直前にナチスに入会し、シュタールヘルムがそれ以後ヒトラーの下につくという声明をラジオで表明していたから、シュプランガーの入会はナチスへの間接的な関与をも示すものでもある。事実、1931年10月のナチ党やシュタールヘルム等による声明にシュプランガーは直ちに文章で反応した。論文集7番目の「現代の教育課題における国家の権利と限界」に関する1930年11月21日の講演(N330g)で、シュプランガーは既にヴァイマルが破産の危機にあるとし、その危機が「一党国家の形態」(N330g, S.167)、つまり独裁制においてのみ克服可能であると考えに至ったとヘリンクは結論づけている。事実、「深く精神的で非常に将来性のある権力、現存する国家のあり方[つまり、ヴァイマルの議会制民主主義]に対して最も内的な確実性から反抗することを敢えて行う権力もあり得るでしょう——、と言いますのも、いかなる国家形式も永遠ではないからです」(ibd., S.167, 強調と補足は引用者)。

1932年の論文集の最後の論文「現代」(N330h)は、この論文集のための書き下ろしであり、この著作の出版の日付1932年9月を副題としている。これはシュプランガーが政治的教育学者であることを宣言するものであった。既に同年7月1日にライヒ首相に任命されたフランツ・フォン・パーベンは同月20日に社会民主党が優位を保っていたプロイセン政府を解体したが、これは実質的にヴァイマル共和国を抹消するものであった。ヘリンクはこの事実がシュプランガーにこの論文集を公にして国民を満場一致へと鼓舞する決断をさせたとしている(vgl. Helling1966, S.3)。ヴァイマル時代には「長らく、多くのものが欠けていた。この疑念とこの自己放棄を封印する人物が、偉大なことをなして」おり、それ故に「国家のために自らを犠牲にすることは、形而上学的尊厳である。誰も死ぬ覚悟の対象としない国家は、全く国家ではなく、むしろ疑わしく病弱な利害関心団体である」(ibd., S.203-204)として、ヒトラーへの支持を示しているとされる。

そして、1932年の「政治的教育学者としてのシュプランガー」では当然記述できなかったヒトラー政権掌握後のシュプランガーの言葉による振る舞いについて、ヘリンクは追跡する。彼は雑誌『教育』の1933年3月号の、最もよく引き合いに出されるシュプランガーの文章を取り上げ、第一次世界大戦敗北後の「長い消耗の時期から」ようやく目覚めさせたヒトラー政権に「民族としての我々の基本的な生存権」のために「戦争を単に過去のものとして見るのではなく、……二度目の出発の必然性を予想せざるを得ない」(N350, S.401)として第二次世界大戦を預言する。そのためにシュプランガーはかつての名著『生の諸形式』の6つの教育理想としての人間類型を政治的人間へと縮減

し、さらに派生的作用さえも時代に合わせて限定させている。「政治的人間の最も古く最も分かりやすい特徴は、好戦的人間（軍隊的人間）である」（N366, S.68）。そして、この奉仕と犠牲へ向けての教育、旧体制の1890年以降の脱人文主義的な政治教育、そして国家社会主義という偽りの仮面をつけた国家独占資本主義の独裁制国家への自発的従属のための教育の実現を、シュブランガーは1937年の日本での講演でヒトラーの努力であるとしている。すなわち、「敗北した戦争後にドイツにとって存在していた最も重要な問題は、非常に強く異質な種族の影響下に置かれていたマルキシズムの労働者集団を、いかにして再び愛国的にすることに成功するのか？というものでした。このほとんど不可能に思われる行いを成就したこと、これがアドルフ・ヒトラーの最も本質的な功績です」（N414, S.164）。国家社会主義によるシュブランガーの完全平定を、ヘリンクは国内の敵が打ちのめされたしるしとして、ナチスがその後は国外侵略へと転じるようになったとしている（vgl. Helling1966, S.4）。雑誌『教育』における1939年4月20日のヒトラーの50歳の誕生日に、シュブランガーと彼の弟子でその雑誌の共同編集者のハンズ・ヴェンケは、「ライヒの首領、指導者にして庇護者」（In: Die Erziehung. Jahrgang, 1939, S.265）と祝福した。

以上のように、ヘリンクの「シュブランガーの道」は、表面的にはシュブランガーをヒトラー政権誕生の「精神的開拓者」として叙述している。ヘリンクは部分的に正しく、部分的にはそうでないようにも思われる。それはこの文章に対するアイザーマンの反論、いやむしろアイザーマンの指摘とは別の考察からも明らかにできる。続いて、これらをかかなり手短に通覧した上で、シュブランガーを過度に高く評価したり低く見積もったりせず中立的な——したがって、彼の否定的な価値中立的な立場を手に入れなければならない。

*

ヘリンクが「シュブランガーの道」を世に問うた翌年の8月に、彼が中心的な役割を演じていたシュヴェルム・クライスの雑誌『学校と国民』の編集者ヴァルター・クルーテ——彼はヘリンクのギムナジウムでの教え子である——に宛てて、ヘリンクに対抗する論文の掲載を求めるヴァルター・アイザーマンの長大な文章が届けられた。その書簡には、掲載に応じない場合には「出版法を根拠にしたさらなる措置」を講ずると記されていたというから、アイザーマンの憤激はただ事ではなかったことが分かる（vgl. Himmelstein2003, S.303）。これも当然の話で、アイザーマンはシュブランガーの愛弟子であった。結局のところ、この雑誌の編集部は彼の文章をそのままの形ではなく、「エ

ドゥアルト・シュブランガーと国家社会主義」というタイトルで「フリッツ・ヘリンクへの回答」という副題をつけて切り詰めた文章を掲載し、そこに編集部へのヘリンクよりのコメントをつけ加えた。アイザーマンの主張は次のようなものである。900——これは不正確で、1300近く——にも及ぶ公刊物の全体的連関を基礎とすることなく、その中から僅か10程度のもを恣意的に拾い上げて、反民主主義的、反社会主義的、軍隊的傾向を指摘することによってナチスとの共同責任をシュブランガーに問い糾すのは不当である。むしろ、「シュブランガーの妥協のないフマニテートを正しく取り扱うこと」（Eisermann1967, S.17）が必要である。彼が持ち出すヘリンクへの反証では、例えば1933年の論文「出発と変革」において、シュブランガーが「国家社会主義の病的増殖への……批判を実行して」おり、国家社会主義による「ユダヤ人大学教師や諸大学への強められるテロに直面して、1933年4月24日にベルリン大学教授の自らの公職を辞する決断をする」ことによってナチスに抵抗しているばかりでなく、彼が体制の敵であり、「体制に迫害された人であったこと」はテオドール・ホイスやアドルフ・グリメ、ヴァルデマール・エールリヒなどの証言があり、1944年9月に反ナチスの抵抗者としてゲシュタポに逮捕されたこと、もしシュブランガーが親ナチであったとすれば、戦後にソヴィエト進駐権力下においてベルリン大学総長に任命されることはなかったであろうといったことが挙げられている（vgl. ebd., S.17-18）。こうした反論に対する雑誌『学校と国民』編集部の反応は冷やかである。ヒトラーとの関係が悪化したのは特段シュブランガーに限ったことではなく、ゲーリンクやシャハトもそうであった。ナチス独裁制誕生に対するシュブランガーの罪は、彼らが免責されることがないと同様である。また、ゲシュタポによるシュブランガーの拘留は枢軸国日本のとりなしによって解かれたのであり、ヒトラーの授権法に賛同したホイス（やシュブランガーの高弟であり、そもそも彼の側に立っているエールリヒ——編集部はこの事実には触れていない）を免罪の証人として召還するのはふさわしくない。さらにはソヴィエト進駐軍はグロプケのような親ナチをも任命しているのだから、ナチス共感的なシュブランガーが大学総長になったとしても不思議ではない。このような調子であるが、反論としてはいささか根拠が薄く悪意のある対応であろう。とはいえ、編集部はシュブランガーを単独で標的とするものではないヘリンクの本来の意図を理解していたようである。例えば、「シュブランガーの道」でヘリンクは、ボルシェヴィキの根絶を教育ではなく、政治によって解決するよう望んだヴィルヘルム・フリットナー（vgl. Helling1966, S.3）と並んで、ハンズ・ヴェンケも取り上げていた。ヘリンクの文章の前年に（3月31

日)、有名雑誌『デア・シュピーゲル』は「ヴェンケ、ルールにかかる影」というタイトルで、ヴェンケのナチズムへの支援を告発している。ヴェンケは1926年にシュブランガーの下で学位を取得し、直ちに師のアシスタント、ベルリン大学外国研究所の私講師を務めた。1939年にナチ政権下でエアランゲン大学の私講師、そして1941年に同大学の員外教授、その2年後には正教授となっている。この間にシュブランガーらが創刊した雑誌『教育』の編集委員を、紙不足によるその廃刊まで自らの師と共に務めた。その彼は、『シュピーゲル』誌上で「自らの民族義務をペンで果たした」と語られている。彼はヒトラーの政権掌握後に、民族の正当な尺度が人種的素質にあるとし、SAの精神を国家社会主義の本質的な精神であるとして、1942年のスターリングラードの年には『全面戦争の哲学』を著して、「この民族戦争は自由戦争である」という一文を記している。『シュピーゲル』誌は、ヴェンケにこうした経歴があるにもかかわらず、1953年にトゥービンゲン大学総長に、翌年にハンブルクの学校評議員になり、1963年には新たにボーフム大学(ルール大学)総長になる予定であったが、「偽装された過去」の洗い出しとテレビによるヴェンケ批判によって、彼が予定されていた総長になることはなかったという記事を掲載している(Spiegel1965, S.40)。そして、ヘリンクもヴェンケがナチによる「大ドイツへのボヘミアとモラヴィアの編入」を歓迎し、戦争を「民族の若返り」と考えていたことを指摘している(Helling1966, S.4)。つまり、「シュブランガーの道」におけるヘリンクの意図は、多くの大学人がヴァイマル時代から第二次世界大戦勃発までの政治的状況を冷静な中立性で見ず、現実政治的感覚のない単なる保守性でナチスの悲願を許すお膳立てをした大学の一般的状況を描き出すことであった。したがって、ヘリンクの文章は1960年代のこうした時代状況からすれば、彼が新たな議論を呼び起こす可能性を有していた。しかし、アイゼンマンのシュブランガー擁護やクルーテのヘリンク擁護という、共に感謝しなければならないそれぞれの恩師のための主観的議論に終止してしまい、ヘリンクの問題提起は継続的展開には至らなかったと思われる。ただ、『学校と国民』誌におけるリヒャート・メッシュカートの議論は、彼がヘリンクの同志であり、同時にかつてシュブランガーと関わりがあっただけに、時代状況に応じた、ある程度冷静な判断が下されている。彼によれば、ヴァイマル時代の「改革の試みは大学教授集団の保守的態度などがもとで挫折した。……知識人たちは1789年に告知された理性の王国を放棄し、政治的闘争の土台でフマニテートを放棄した」(Meschkat1967/68, S.23)。そして、彼らはファシズムの担い手、さらにはその創造者ともなった。メッシュカートはそうした代表例として、今日ではよく知られ

ている大学人として、かつてアインシュタインと共に光電効果式を発見しつつも、彼を「ユダヤ的思考」の持ち主として拒否し、自ら「ドイツ的物理学」を提唱したフィリップ・レーナルト、大学からユダヤ的要素を排除することを主張し、大学をファシズムの要塞とした物理学者のヨハネス・シュタルク、そして1933年1月11日のナチス教員同盟によるライヒ選挙前の支援集会での演説や同年5月27日のフライブルク総長講演でナチズムの告知人として姿を現したマルティン・ハイデガーなどを列挙している——特にハイデガーに対して、メッシュカートは「『賢明な』人物の愚鈍の証拠」(ebd., S.24)と、彼の行動には極めて厳しい。メッシュカートはそうした大学人の一人にシュブランガーが属しており、ヘリンクの「シュブランガーの道」も当時の保守的¹⁾大学人全体を念頭に一つの事例としてシュブランガーを取り扱ったとしている。そして、彼はこの破局の始まりを「ドイツの学問史と大学史の悲劇の資本である!」と断定的にまとめ反省を求めている(ebd., S.23)。他方で、メッシュカートは自らの体験から、シュブランガーがナチズムに迎合していったもう一つの理由にも言及している。彼は1921年から1923年までシュブランガーが設立した教育教授中央研究所の共同作業部会の一員——シュブランガーが主著『青年期の心理』において書簡を公開した際のその受取人エルンスト・ゴルトバックを含む約30名の教育実践者のうちの一人——であった。彼はシュブランガーの分別のよさを認めながらも、「世事に疎いままに」、教育学体系では「ペスタロッチやコメニウスは何らの役割も演じていなかった」としている(ebd., S.23)。当時既にこれらの教育者についてシュブランガーは頻繁に取り扱っていたから、メッシュカートのコメントは奇異に思われるが、おそらくシュブランガーが自らの教育学的思考からこれらの教育者を自らの教育的ないしは政治的実践に取り入れていないことへの不満の表れであろう。この不満には、徹底的学校改革者同盟に対するシュブランガーの評価も呼応している——メッシュカートは彼がこの同盟を「真剣に取り上げるに値しない好ましからざる邪魔者」(ebd., S.23)と見ていたと述べる。既に触れたシュブランガーのヴァイマル嫌いも挙げられている——「無愛想で『非』政治的で、いくらかシニカル」(ebd., S.23)。ここでの「非」政治的という表現でメッシュカートは、シュブランガーが政治的でなかったと述べているのではない。むしろ、ヴァイマルへのシュブランガーの政治的隔たりを示すためである。そして、ヘリンクの1966年の文章の隠された主張を、メッシュカートはシュブランガーの中に読み取っている。彼はシュブランガーがヴァイマル共和国への「必然的に生まれた政治的態度決定」を「その時代の多くの学者と同様に」(Meschkat1967/68, S.23, 強調は引用者)

行わなかったことを指摘している。つまり、シュプランガーはヴァイマル誕生の歴史的必然性を認めず、旧体制の心性に留まっていた。これはヘリンクへの十分な援護射撃であろう。

*

ヘリンクの「シュプランガーの道」が時代の事例研究として読解可能であるとするなら、それを事例として扱えるだけの背景と思考の枠組みが彼の中になければならない。そうでなければ、この文章の主張は全く根拠がなく、アイザーマンの反論に屈服することであろう。とはいえ事実、その背景をなす二つの文章がある。一つは1932年のシュプランガーに関する文章以前に書かれた小論「社会危機とファシズム」(Helling1931)であり、もう一つは既に第二次世界大戦中から執筆されていた著作『ドイツ史の破局の道』(Helling1947)である。これらはファシズム研究としてはかなり早期のものであり、その意味でも興味深いのだが、それ以上にファシズムが徹底して経済的・政治的・社会的な歴史意識から、つまりシュプランガーの思考方法とは全く異なる仕方でも考察されている点が注目される。ディーツも1933年までのヘリンクの経歴を追いかける中で、前者を「最高度に印象深い分析」と高く評価している(vgl. Dietz2003a, S.165)。紙面の制限もあるので、本稿では1931年の小論を中心に話を続けたい。

既にナチスの政権掌握の前に、「社会危機とファシズム」は、ドイツが歴史的に見ていかにしてファシズムへと向かうのか、そして破局に至るのかという問題設定で進められている。その際に、ファシズムと資本主義、マルキシズムとの関係にまなざしが向けられている。ヘリンクはこれに取り組む前に、先に触れた小論「中等教育機関の悲劇」と全く同様に、19世紀のヨーロッパが技術や自然科学、資本主義の爆発的展開によって、工業化や商品生産増大、販売市場の拡大、賃金制の普及といった上昇の時期を過ごし、その上昇欲から同時に、植民地の拡張や帝国主義をも経験したとする。初期の資本主義においては周期的な経済危機があったとはいえ、自由主義的な競争と「神の見えざる手」に委ねて、さらに進歩する機械化と大量生産、資本と企業の独占形態、飛躍的な生産性といった光の側面を持つ一方で、「中小企業の沈下、都市や地方における中間身分の圧殺、労働大衆の解雇、購買力の低下、国内市場での販売危機、……大衆の貧困の増加、……数少ない帝国主義強国の指導権〔と国内外への様々な抑圧〕、……債務者の国家と屈服された人々、……あらゆる結束システムの不安定」(Helling1931, S.402, 補足と強調は引用者)などの資本主義の矛盾をも生み出している。脂肪肝の大資本主義はその見た目の豊満さとは裏腹に病に蝕まれており、こうしたこ

とが世界大戦の直接的原因であった。ヘリンクは以上のような1914年以前の経過を、「市民社会の上昇の時期が終わり、下降の時代が始まった」(Helling1931, S.401)と考えており、世界恐慌によって資本主義が終わるとまで考えていた——「市民社会の構造転換」(ebd., S.406)。そして、資本主義の終わり、「資本主義的發展の危機の産物」がファシズムであるとしている(ebd., S.402)。

この状況下でファシズムを不満の受け皿として頼りにしたのは、「大資本主義のメカニズムの押しつぶす力と社会主義プロレタリアートの革命的殺到」に、つまり上からと下から同時に脅かされている大衆、「これまで政治的でなかった中間階層」であり、具体的には「財政資本やコンツェルンの圧力と組合の圧力」に挟まれた中小企業家、企業や国家の緊縮や解雇によってプロレタリア化したサラリーマンや官吏、「郷里において自分自身のための余地を見出せなかった前線兵士や将校」、高学歴貧困の予備軍である大学生やギュムナジウムの生徒、「諸政党の政策に失望した労働者」などである(ebd., S.402)。したがって、ファシズムは当初、資本主義とプロレタリアートの革命的傾向、つまり金権政治とボルシェヴィキに対する両面作戦を実行しようとする。しかし、巨大な二つの敵に対するこの作戦は不可能であった。そこでファシズムは「運動の力を一つの敵に集中し、もう一つの敵との闘いは後回しにする」(ebd., S.404)。ここに和解の仮象が現れる。つまり、共通の敵であるボルシェヴィキに対するファシズムと資本主義による共同戦線である——敵の敵は見方というわけである。これによって「資本主義はファシズムの脅威に対する恐れをなくし」、膨大な金額が銀行や工業、大土地所有者からファシストへと寄せられる(ebd., S.404)。他方、ファシズムの側でも資本主義への軟化が進む。企業や銀行の国有化、株式や私的所有地の没収といったかつてのラディカルな社会主義的プログラムは姿を消し、「秩序の保全」がスローガンとなる(vgl. Helling1931, S.404)。ヘリンクはファシズムが両面作戦を取っていた時期を第一の局面、そしてこの資本主義との蜜月関係の時期を第二の局面としている。

そして、ファシズムの第三の局面が既に始まっていると、ヘリンクは1931年当時の状況から判断する。つまり、現在進行形の——ボルシェヴィキ制圧後に、まだ実現されていない——資本主義の完全掌握を目論む「独裁制の局面、権力占有の最終局面」である(ebd., S.405)。政党や組合、新聞の解体、言論集会の阻止や弾圧(テロ)、ストライキの禁止など、攻撃対象をボルシェヴィキからさらに拡大し、その攻撃は「ファシズムによって救済されるという信仰でファシズムを運び上げていた諸階層に対しても向けられる」(Helling1931, S.405)。賃貸料の値上げ、労働時

間の延長、賃金カットなどは中間階層にとってはかなりの負担となるが、大資本主義にとっては有利に働く。しかも、ファシズムは——ヘリンクはイタリアを主に事例としている——相続税の廃止、資産税や贅沢税の引き下げ、大企業への大規模な資金援助などの金権政治を行う。ここに至ってかつての自由主義的資本主義から帝国主義的独占資本主義を経て国家資本主義、「資本主義の死の道」(ebd., S.406)へと至る。このように「独裁制の形式における農業資本や工業資本、銀行資本の支配」が成就することになるかもしれないとヘリンクは預言者的に振る舞うが、彼は断固としてファシズムに反対する——「ファシズムは救済をもたらさない。ファシズムが大土地所有者の支配階層にもたらす軽減は、大衆の弾圧と悲惨化によって贖われたものである」(ebd., S.406)。望みは叶わなかったものの、彼はこの時点ではまだファシズムの対抗勢力として、社会主義や共産主義に期待していた。「ファシズムの全面的独裁に至る道が通じているのかどうかは、社会主義的プロレタリア的運動の抵抗力にかかっている」(ebd., S.405, Fn.2)。

以上のような資本主義がファシズムにどのようにして取り込まれ、共感し、結果的に身動きが取れなくなってしまうのかは、「シュプランガーの道」と重ねてみることも把握可能である。戦争敗北後も変わらず存続した大資本家は、旧体制における保守であった。しかし、教養市民層の頂点に位置する大学教師たちはこうしたいわゆる経済市民層を内心軽蔑していた。また、彼ら、そしてシュプランガーも資本家と同様に、ボルシェヴィキへの危機感を常々持っていたのは、既に十分見たところである。つまり、ヘリンクの言う第一の局面において、大学の敵はファシズムが想定する敵と同じであった。ただし、ファシズムはその急進的な過激さのために、この時点での大学人からは無視されていた。ケーテ・ハートリヒとシュプランガーとの往復書簡では、ヒトラーの名前は1924年から登場するが、その年の7通の書簡のうち、シュプランガーの側からの言及は1通にすぎず、しかもヒンデンブルクの信奉者であった彼のヒトラー評価は冷ややかであった——「ヒンデンブルクはヒトラーに関して好ましく考えていないようです」(ES-KH10.04.1923)。その評価が変化し始めるのは1931年、引き合いに出す頻度が高まるのは象徴的な『民族、国家、教育』の出版年である1932年からである。それはヘリンクの語った第二の局面に当たる。その局面において、ファシズムがボルシェヴィキに攻撃の対象を一点集中化することによって、資本主義は自らの利権を守るファシズムとこの対象に対して闘争同盟を形成したわけだが、ヘリンクが述べているように (vgl. Helling1931, S.404)、この同盟関係が強くなればなるだけ、単に資本家を越えて広く非マルクス主義的勢力の共感を得ていたから、その勢力の一員でも

ある大学にとってもこの同盟は不愉快なものではなかったであろう。したがって、大学はこの闘争への共鳴において、以前抱いていた経済市民層への嫌悪を忘れ——シュプランガーの場合には大資産家アルフレート・フーゲンベルクが彼の共感するドイツ国家人民党を率いていたということも作用したかもしれない——、またファシズムの資本主義に対する軟化によって、それまでボルシェヴィキとさほど変わらなかった過激な政党プログラムが姿を消すことになり、その結果として「秩序の防衛」は大学の中でも受け入れやすいものとなったと思われる。同時にこの防衛は、20世紀の転換期以来、さらに加速化していた工業化や都市化、非共同体化など、シュプランガーがよく文字にしていた「引き裂かれてあること (Zerrissenheit)」の矛盾した状態で正義となり、そもそも建国時からあったヴァイマル嫌悪とともに、共和国のころころ変わる連立政府、精神のない数の論理、道徳性のない利害関心の乱反射に辟易する中で、ファシズムの「秩序の保全」は大学人にとって期待の言葉となった。ヘリンクはシュプランガーの第一次世界大戦の熱狂から1933年3月に至るまでのファシズムへの次第に変化しつつ高まる共感を見ていた。1931年のケーテ・ハートリヒ宛の書簡では、シュプランガーがヒトラーに接近しつつある様子が窺える——「ヒトラーの顔は非ドイツ的に見えます。ほとんどアルビーネ的です」(ES-KH07.07.1931)。確かにヒトラーが中央ヨーロッパ山岳地帯の人々の風貌であるとして彼を小馬鹿にしてはいるが、ここでシュプランガーが採用している表現方法はまさにヒトラーの人種論的なものである。そして、第三の局面においては、シュプランガーはファシズムが政治的解決となる可能性も考慮に入れ、国家社会主義国家が実体化されるようになる。「最終的に私に示されているのは、実体 (Substanz) です。全体は洗礼を授ける者、目につかないものを見る者を思い起こします。そうでなければ、実体は私たちの時代状況において適しているものを語らねばなりません」(ES-KH05.02.1932)。洗礼者である来るべき国家という実体 (?) が語るものとは、秩序、紀律、義務、犠牲であろう。さらに、1932年10月31日に彼はケーテ・ハートリヒに宛てて次のように述べている——「私は喜んでヒトラーに与するでしょう。ヒトラーが呼び起こした『運動』がやはり、その現実政治の責任の時点ではもはや止められないのは真実です。……いかなる思索者も予視しなければならない経験を国家社会主義がなすまで、私にも待つ力はもはやありません。称賛される新しい時代……」(ES-KH31.10.1932)。また10月31日では「私にとって最後の希望です」と語られていたパーペンらによる保守連立政府への信頼を翌月の12日には、進むべき道を「パーペンらの政府が有しているとは到底思えません」として早くも捨て、

「もし私が若かったとしたら、国家社会主義者になっていたことでしょう。……若者が『心奪われている』のなら、……私は彼らと共に進みましょう」と語っている (ES-KH12.11.1932)。そして、彼はその四日後の16日には彼女に、「独裁は恣意的になされるものでも、またさしあたりのものでありません」(ES-KH16.11.1932)と述べ、一党独裁的な傾向を受け入れる態勢をとっている。これはやはりシュプランガーに限ったことではなかった。「愛国主義的精神が真のオルギアを祝福する中等教育機関と何よりも大学が、抵抗革命の抱卵の場となった」(Helling1947, S.199)。ここにおいてファシズムによる大学資本の支配も完了する。

以上のように、ヘリンクより見れば、シュプランガーは明らかにナチズム政権成立に加担したとも見做せるが、彼には抵抗の余地は存在しなかったのか？ アイザーマンの反論にあったように、確かに1933年4月に彼はプロイセン文化事業省大臣ルストに対して、ベルリン大学辞職の願いを提出している。しかし、これがファシズムに対する全面的な抵抗であったのかどうかは定かでない。同月7日の職業官吏再建法によってユダヤ人や反ファシズム的政党の帰属者や関与者と見做された大学教師に対して、休職または解雇がひっきりなしに命じられたり、翌月の焚書に象徴される学生による反ユダヤ主義的な行動が、学問の自由を侵害する大学の政治的均質化を惹き起こしたりしている状況を目にして、確かにシュプランガーは絶望した——「これが限界だ！という稲妻のような意識。ここに型取られた(別名、政治化された)大学が始まる」(N695, S.461)。こうした経緯から辞表提出に踏み切ったという説明がよくなされるが、我々にはこれは表向きの理由であったようにしか思われぬ。この時点ではまだ彼は国家社会主義に失望してはいなかった。彼はなお、「ドイツ民族の道徳的再生とヒトラーの意図を交代すること」がまだ可能であると考えていた (N695, S.461)。むしろ、次の事実が辞表願提出の引き金になったと思われる。つまり、彼が辞表を提出した日は、ベルリン大学哲学部にこの大学への打診や相談もなしに——したがって、シュプランガーへの助言依頼もいままに——、政治教育学講座と政治教育学研究所の設置が通達された直後であった。しかも、そのポストに据えられたのは、ドレスデン工科大学にいたアルフレート・ポイムラーであった。彼はかつてベルリン大学で教授資格を得ようとしたものの、大学入学までの経歴からそれを許されず、他大学でディプロマを取るにとどまっていた。とはいえ、ポイムラーの経歴以上に、彼の任命はシュプランガーにとっては心外、それどころか「公職における侮辱」(N695, S.461)であった。というのも、彼は政治教育論集『民族、国家、教育』を前年に出版したばかりであり、長

らく彼には政治教育学者としての自負があったからである。後にこう語られている。「私自身、私の著作や講演で、国家と教育の間の重要な連関に、学問的な仕方で顕著に注意を払ってきたと信じていたし、同時に私がドイツ的信条に、それ故に健全なナショナリズムの精神における国民的なものに……賛成してきた」(ebd., S.461)。実際のところは、そうした事実がナチスに全く知られていなかったことが彼に判明するのだが、彼の辞職願は自らの名誉毀損を訴えることが主たる目的であったようにも見える。彼はその後、その願いを撤回し、その直後にトーマス・マンによって酷評されることになるプロイセン学術アカデミーにおける6月15日の「ドイツにおける現在の精神的状況」に関する講演でヒトラーを「カリスマ的指導者」と呼ぶ苦し紛れの弁明を行い、表向きはナチスに抵抗することはなく、むしろ同調の姿勢をとり続けた。したがって、シュプランガーの辞表の提出と撤回は、ヘリンクの「シュプランガーの道」が示そうとできたはずの、大学人が国家社会主義体制に取り込まれていく過程を証拠立てる追加事例でもある。事実これには、極めて短い文章ながら、ハインツ・ラーベ——ルートヴィヒ・マルクーゼの偽名である——の指摘がある。ラーベは後のメッシュカートのように「柄の悪い輩」、「哲学的に軽薄な輩」、「掘り下げるほら吹き」——彼がこう揶揄して挙げるのは、シュベングラー、ポイムラー、ハイデガーである——などは脇に置いて、「清楚で学問的な出自を持つ」「深みと高みにある教養人」たちの一人であったシュプランガーが、しかも「ヒトラー・ライヒが媚びへつらうには十分ではないという理由で……腹を立てていた」彼が辞表撤回後に、自らの保身に「懸命になって」おり、新しい民族思想を刻印する「カリスマ的指導者」という「まだ誰も口にしていなかった」表現を用いるという「恐ろしい状況を示している」ことに驚いている (Raabe1933, S.74)。ラーベのこの文章のタイトルは、まさにヘリンクがつけるべきであったもの、つまり「シュプランガーの事例」である。良心的で誠実な教養人でさえ、時代の波に飲まれてしまうことを、ラーベはヘリンクとほぼ同じ時期に違う角度から看取していた。

*

とはいえ、本稿を閉じるにあたって、我々は次のようにコメントしなければならない。すなわち、確かにシュプランガーはナチス政権の成就に加担してしまうこととなったが——象徴的なのは日本滞在時の三重県松阪におけるヒトラー式敬礼の写真である (vgl. Himmelstein2003, S.249)——、彼自身が国家社会主義者となることはなかったのであり、1918年以前のカイザー・ヴィルヘルム時代の保守性は、ヴァイマル期から1930年代を経て、ようやく民主主義

に転向したとする第二次世界大戦後でも維持され続けた。彼は晩年になっても「プロイセン的なもの」の本質についての草稿を残している（『シュプランガー全集』第8巻所収）。一時期、彼は国家社会主義の底流に、これとの類縁性があると見誤っていたのは間違いない。1945年以後でも、その認識は変わっていない——「破局へと導いたのは、国家社会主義ではなく、本質的にヒトラー主義であった」（N696b, S.53）。これは彼の認識の甘さを露呈している。それ故、ポイムラーの政治教育学講座の任命の際に、そのポストは自らに与えられるべきとシュプランガーは考え、「世事に疎い」彼はその事実がもたらす危険性には目が行かなかった。ヘリンクが当時の保守的の大学人をナチズムの水先案内人として糺したのは、彼らが第一次世界大戦における責任問題が反省されなかったことを世に知らしめるためであった。彼の社会主義、さらには共産主義への転向は、ヴァイマル誕生後も態度変更しなかった資本主義と大学への対抗を意味していたのであろう。彼の「シュプランガーの道」の背後には、大学人が戦争責任の問題と真摯に取り組むことがナチズムの台頭と政権掌握を招くことを防ぎ得た唯一の道だったという確信があった。ヘリンクが高い教養を持ちつつも、大学人の道へと歩まず、故郷の田舎教師として留まりつつ、徹底的な学校改革者同盟の主要なメンバーとして旧体制の思考に異議申し立てしたのも、このよ

うな認識があったからであろう。とはいえ、もちろん我々は彼の判断が狂信的な思い込みであるとは思わないが、シュプランガーに対する彼の見方には、紋切り型的なところもあるように思われる。ヘリンクとの比較の対象としては、シュプランガーの下で学位を取得しつつも、1933年後に彼を裏切って彼によって「背信者（Abtrünnige）」（ES-KH15.05.1939）と呼ばれたゲルハルト・ギーゼ——彼は1937年にナチスに入党している——のほうが、より正確な評価をしていたように思われる。また、ヘリンクとギーゼの解釈の差異はその立場の違いから判断すれば、わが国のかつての状況でも観察されるものである。シュプランガーを時代状況へどのように組み入れるのが適当であるのかという問題は、ヘリンクの文章だけで判断するのはいささか早計である。彼と共に、エールリヒヤコーパイ、ギーゼ、ヴェンケ、さらにはフェッチャーといったシュプランガーの弟子たちの見解や1932年の論文集の書評、あるいは基本的にこの論文集を下敷きにしている阿部仁三の『現代とシュプランガーの文化教育学』（1935年、目黒書店）などを利用して再吟味する必要があるだろう。そして、さらにその奥にあるペスタロッチと共にシュプランガーとヘリンクが有していた「教育への信頼」が問われねばならないだろう。社会変革に教育はどこまで寄与するのか？ 筆を置くときが来たようである。

Literatur

以下は本稿執筆に当たった参考文献のほんの一部と引用文献である。本文では以下の略号を用いている。

- Dietz2003: Dietz, Burkhard[hrsg.]: Fritz Helling, Aufklärer und „politischer Pädagoge“ im 20. Jahrhundert. Frankfurt a. M. u.a.: Peter Lang, 2003.
- Dietz2003a: Sozialistische Orientierung und frühe Opposition gegen den Nationalsozialismus. In: Dietz2003, S.155–167.
- Eisermann1967: Eisermann, Walter: Eduard Spranger und der Nationalsozialismus. Antwort an Fritz Helling. In: Schule und Nation. Jahrgang 14, Heft 2, 1967, S.17–18. [samt einer Stellungnahme der Schriftleitung].
- ES-KH: Briefwegsel zwischen Eduard Spranger und Käthe Hatlich. Digitale Bibliothek der Bildungsgeschichtliche Forschung des Deutschen Instituts für Internationale Pädagogische Forschung. URL: <http://bbf.dipf.de/digitale-bbf/editionenspranger-hatlich>. Zitiert als ES-KHBriefdatum.
- Helling1927: Helling, Fritz: Pestalozzi. In: Helling1958, S.11–16.
- Helling1929a: Die Tragödie der höheren Schule. In: Die neue Erziehung. Jahrgang 11, Heft 1, 1929, S.3–9.
- Helling1929b: Helling, Fritz: Georg Kerschensteiner. In: Die neue Erziehung. Jahrgang 11, Heft 7, 1929, S.501–508.
- Helling1931: Helling, Fritz: Gesellschaftskrise und Faschismus. In: Die neue Erziehung. Jahrgang 13, Heft 6, 1931, S.401–406.
- Helling1932: Helling, Fritz: Der Bankrott der offiziellen Schulreform. In: Helling1958, S.19–25.
- Helling1947: Helling, Fritz: Der Katastrophenweg der deutschen Geschichte. Frankfurt a. M.: Klostermann, 1947.
- Helling1958: Helling, Fritz: Schulreform der Zeitenwende. Schwelm: GMBH, 1958.
- Helling1966: Helling, Fritz: Eduard Sprangers Weg zu Hitler. In: Schule und Nation. Jahrgang 13, Heft 2, S.1–4.
- Helling2007: Dietz, Burkhard, Biermann, Jost[hrsg.]: Mein Leben als Politischer Pädagoge. Frankfurt a.M.: Peter Lang, 2007.
- Himmelstein2003: Himmelstein, Klaus: „Eduard Spranger und Nationalsozialismus“ —Auseinandersetzung Fritz Helling mit Eduard Spranger. In: Dietz2003, S.303–315.
- Himmelstein2013: Himmelstein, Klaus: Das Konzept Deutschland. Studien über Eduard Spranger. Frankfurt a. M. u.a.: Peter Lang, 2013.
- Keim2003: Keim, Wolfgang: Fritz Helling: Politische Pädagogie im Spannungsfeld von Konvention und Gesellschaftskritik -Eine biographische Skizze. In: Dietz2003, S.37–98.
- Meschkat1967: Meschkat, Richard: Zur Fritz Helling: Eduard Sprangers Weg zu Hitler. In: Schule und Nation. Jahrgang 13, Heft 2,

1966, S.23-24.

Raabe1933: Raabe, Heinz [d. i. Ludwig Marcuse]: Der Fall Spranger. In: Das neue Tage-Buch. Jahrgang 1933, Heft 3, S.74.

Spiegel1965: Spiegel, Der: Wenke, Schatten über der Ruhr. In: Der Spiegel. 14/ 1965 (31. März), S.40.

N099: Spranger, Eduard: Fünfundzwanzig Jahre deutscher Erziehungspolitik. Berlin: Union, 1916.

N100: Spranger, Eduard: Das humanistische und das politische Bildungsideal im heutigen Deutschland. Berlin: Mittler, 1916.; auch in: N330, S.1-33[N330a]

N301: Spranger, Eduard: Pädagogik. In: Abb, Gustav[hrsg.]: Aus Fünfzig Jahren deutscher Wissenschaft. 1930, S.86-103.

N330: Spranger, Eduard: Volk, Staat, Erziehung. Leipzig: Quelle & Meyer, 1932.

N330b[N180]: Spranger, Eduard: Der Anteil des Neuhumanismus an der Entstehung des deutschen Nationalbewußtseins. In: N330, S.34-56.

N330c[N206]: Spranger, Eduard: Über Erziehung zum deutschen Volksbewußtsein. In: N330, S.57-76.

N330d[N261]: Spranger, Eduard: Probleme der politischen Volkserziehung. In: N330, S.77-106.

N330e[N295]: Spranger, Eduard: Wohlfahrtsethik und Opferethik in den Weltentscheidungen der Gegenwart. In: N330, S.107-134.

N330f[N304]: Spranger, Eduard: Volkskenntnis, Volksbildung, Volkseinheit. In: N330, S.135-152.

N330g: Spranger, Eduard: Recht und Grenzen des Staates in den Bildungsaufgaben der Gegenwart. In: N330, S.153-175.

N330h: Spranger, Eduard: Gegenwart(September1932). In: N330, S.176-211

N350: Spranger, Eduard: März 1933. In: Die Erziehung. Jahrgang 8, 1933, S.401-408.

N366: Spranger, Eduard: Der politische Mensch als Bildungsziel. In: Die Erziehung. Jahrgang 9, 1934, S.65-79.

N695: Spranger, Eduard: Mein Konflikt mit NS-Regierung 1933. In: Universitas. Jahrgang 10, 1955, S.457-473.

N696b: Spranger, Eduard: Fünf Jugendgenerationen 1900-1949. In: Spranger, Eduard: Pädagogische Perspektiven. 3. Aufl., Heidelberg: Quelle & Meyer, 1955. S.25-57.

(2019年11月26日 受理)